

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 岩橋小弥太と國學院大學：その教育と古文書学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齊藤, みのり メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000689">https://doi.org/10.57529/0002000689</a>

# 岩橋小弥太と國學院大學―その教育と古文書学

齊 藤 みのり

## はじめに

岩橋小弥太は戦前―戦後期に活躍した学者であり、國學院大學出身の教授（後に名誉教授）として長らく教鞭を執つた他、東京帝国大学史料編纂官や明治大学の教授を勤めた人物である。学問は古代から近世にわたり、特に古記録・古文書に精通していた他、中世芸能史、古代律令制など多岐にわたる業績がある。

その生涯について、岩橋小弥太の自伝である「葉間堂老翁自伝<sup>①</sup>」及び「岩橋小弥太博士略年譜<sup>②</sup>」を参照すると、明治十八年十月十一日、大阪船場に住む土族の籐商の家に生まれ、同三十二年、大阪府第五中学校（のち天王寺中学校に改称）に入學し、ここで武田祐吉や折口信夫、西田直二郎らと親交を結んだ。

中学卒業後の明治三十七年九月、國學院大學<sup>③</sup>の師範部国語漢文科に入學した。当時は国語漢文と歴史地理の二科に分れており、国語漢文科の授業を受ける一方、歴史地理科である黒板勝美、三浦周行らの授業を聴講していたと回顧しており、それがその後の研究人生に密接な関係を持つこととなったと言える。また、金沢庄三郎の朝鮮語の授業を

受けたことをきっかけに、当時金沢が携わった三省堂の『辞林』の校正に参加している。

明治四十年七月に國學院大學を卒業した後、岩橋の歴史学者としてのキャリアが始まる。黒板勝美から大阪市史編纂係の仕事を紹介され、同年八月に赴任した。大阪市史編纂係は同四十二年に閉室したが、金沢庄三郎の口利きで東京の三省堂の編修所に勤務し、『辞林』の増補を担当した後、同四十四年より国書刊行会に勤務し、その後大正三年九月に三井家史編纂事務を嘱託されている。同五年十二月、三井家史編纂事務を解かれ岩橋は国書刊行会に戻ったが、同時期に京都帝国大学文科大学助手の席が空いたため、翌六年四月に助手となる。京都帝国大学では国史研究室に勤務し、所有の図書文書を管理し他所より借り入れた図書文書を謄写・校正する仕事をした。

そして大正十三年十月、辻善之助からの紹介で東京帝国大学より史料編纂業務を嘱託され、翌年五月に史料編纂官に任じられた。岩橋は編纂掛において、『大日本史料』第七編を担当し、昭和二十二年に退官するまで、二十年以上の長きにわたり史料編纂官として勤めている。また、大正十三年十月には臨時東山御文庫取調、堺市史資料蒐集事務も嘱託された。

一方で大正十五年五月には、國學院大學教授を嘱託された。この頃より岩橋は各大学で授業を受け持つようになり、昭和六年からは東京文理科大学の講師を嘱託され、古文書学の講義を行った他、同八年四月からは明治大学文科専門部教授として夜学で中世史を講じるなどしており、研究者としてだけでなく長きにわたる教育者としてのスタートを切ったと言える。

この他、昭和十四年八月に文部省より重要美術品等調査委員会委員を嘱託されている。敗戦後に一度辞したが、後年文化財専門審議会専門委員となり、八十七歳まで審査を行った。また、岩橋は多くの編纂事業に関わっており、特に紀元二千六百年奉祝会の記念事業であり、歴代宸翰の集成を目的とした『宸翰英華』<sup>1</sup>の編纂に、同十六年三月、帝

国学院から辞令を受け従事している。

研究業績に関しては、昭和二十四年十月、「中世の謡物に関する研究」により文学博士の学位を受けた。また宸翰を中心とした公家武家文書の調査・筆跡研究により、同三十九年に紫綬褒章を、同四十二年には勲三等瑞宝章を受章している。同四十三年、國學院大學名誉教授となり、同五十三年十二月九日、老衰のため九十三歳で永眠。正四位を追贈された。

この生涯の通り、岩橋は國學院大學で生徒として学問の基礎を学び、後年教授として大学に戻り、教鞭を執った。大学においては、戦前は主に古文書学の講義を、戦後は上代史・法制史などを受け持った。また、国史学会の運営にも長く関わった他、元國學院大學名誉教授藤井貞文・林陸朗、元国士館大学教授で國學院大學でも長らく教鞭を執った村田正志らを育てるなど、教育者としても國學院大學の歴史に大きな足跡を残した人物であった。

本稿では岩橋の学問基盤について振り返りつつ、國學院大學で岩橋がどのような立場にあり、学生達にどのような指導をしていたのかを確認したい。また、岩橋の古文書学への思いと古文書整理についても注目し、それが國學院大學の古文書指導とどう関わっていたかについても触れていきたい。

### 一 岩橋小弥太の学問基盤

岩橋は大学生時代師範部国語漢文科に在籍しており、史学専攻の学生ではなかった。後年、岩橋は学生時代に受けた授業について、「畠山先生から万葉集卷二と源氏物語の桐壺を聞いたが木村正辞先生からも万葉の卷一と卷二を少し聞いた。(中略)その他本郷の帝大を出た武島又次郎、塩谷温先生など教鞭を執られた。それよりも漢文の先生に立派な方が居られた。林泰輔の詩経、宮内黙藏の周易、内田周平の唐宋八家文など宜かった」と回想しており、岩橋の多

岐にわたる学問への興味と情熱が垣間見られる。このような経験も、後年の岩橋の学問の基盤として組み込まれていたと考えられる。

一方で、前述したように史学の授業も聞きに行っていた。黑板勝美の古文書学、三浦周行の法制史などである。この経験は、岩橋の人生に多大な影響を及ぼす事となる。

ここで、黑板・三浦という二人の学者について触れておきたい。黑板勝美は明治七年（一八七四）九月三日生まれ、同二十九年帝国大学文科国史科を卒業し、大学院に入って古文書学の研究に従う一方、田口卯吉が編集した『国史大系』の校訂に従事、その中心となって働いた。同三十四年東京帝国大学史料編纂員、同三十五年には文科大学講師を嘱託せられ、同三十八年東京帝国大学助教兼史料編纂官に任じ、「日本古文書様式論」の論文により文学博士の学位を受領した。同四十一年より二カ年学術研究のため欧米各国に出張し、大正八年史料編纂官兼東京帝国大学教授となり、翌九年からは教授専任となった。昭和十年定年により退官、東京帝国大学名誉教授の称号を授けられ、同二十一年十二月二十一日、七十三歳で没した。東京帝大にて国史を講じ、多くの後進を育成し、大正・昭和期の国史学の興隆を指導した他、日本古文書学の体系を樹立し、その応用面で正倉院文書の調査を始め、東寺・金剛峯寺・醍醐寺などの古文書整理に努め、史料編纂掛の『大日本古文書』の編纂を主宰するなど、その業績は多岐にわたる。

一方、三浦周行は明治四年六月四日生まれ、帝国大学文科大学選科に入学し、同二十六年修了した。同二十八年史料編纂助員、同三十八年史料編纂官となり、この間『大日本史料』第四編鎌倉時代の編纂に従事した。他方明治三十四年には東京帝国大学法科大学より法制類聚編纂を嘱託、また國學院大學にて日本法制史を講じ、以後東京帝国大学法科大学授業担当、同文科大学講師を嘱託された。同四十年京都帝国大学文科大学に史学科が開設し、国史材料の蒐集を嘱託され、ついで講師となり、同四十二年教授に任じ、文学博士の学位を受けた。はじめ日本法制史・同中

世史・古文書学などを講じ、大正に入ると日本社会史、経済史関係の講義もあり、昭和になると文化史の講義も多い。また、臨時御歴代史実考査委員を勤めた他、宮中の講書始に進講した。昭和六年七月京都帝国大学を退官、同大学名誉教授の称号を受ける。同年九月六日、六十一歳で死去。史料に広く精通し、さらに新史料を探索して新史実の究明に業績をあげた他、特に日本法制史の権威、日本中世史の専門家として知られる。研究分野は諸方面にわたり、時代も古代より近現代に至る<sup>9)</sup>。なお岩橋は学生時代、三浦の法制史の授業を受けていた事、京都帝国大学において国史研究室に勤務し、所有の図書文書を整理し、他所より借り入れた図書文書を謄写・校正する仕事をしていた事は前述したが、特に、東京の帝国図書館と醍醐の三宝院に所蔵されていた『満濟准后日記』の覆刻を行った。これは三浦の監督下で行われていた事業で、岩橋は応永三十年から永享七年までの冊子本三十七冊の校刊作業を行っており、京都においても岩橋が三浦の影響を受けたと考えられる。

黑板・三浦の歴史学者としての特徴は、古文書学に重きを置いている事が第一に挙げられるだろう。特に黑板は日本古文書学大系の樹立に貢献した第一人者として能く知られ、岩橋もその影響を受けていると思われる。実際岩橋は、後述するように古文書学に関する造詣が深く、様々な著作もある他、歴史学・古文書学を後進へ指導していた。この辺りについては、次章にて解説したい。

このような二人の学者に影響を受けた岩橋の学問の特徴としては、実証史学の立場に常に立ち続けたことが挙げられる。その研究姿勢は次の文章に現れている。

〈史料一〉岩橋小弥太「郷土史と史料」<sup>10)</sup>

(前略) されば史学は実に史料から発足するといふべきである。史料から歴史的意味を見出す学問が史学で

あるといつても少しも差支はない。それ程史料に関する問題は史学上重大性を有つてゐるのである。(中略) 卓見家らしい顔をした大家が往々初学者に教訓して、史料に拘はれるとか、或は史料の奴隷になるなどかいつてゐるが、それを決して誤解してはいけない。史料に拘はれるとか、史料の奴隷になるなどといふことは、実際上意味のない事である。史料の羅列や史料の提示が歴史でないことはいふまでもないが、如何程史料を尊重してもそれが史料の奴隷になつたり、史料に拘はれたりするのでは決してない。(中略) 併し歴史は飽くまでも具体的な知識でなければならぬ。それにはどうしても史料が必要である。史料を軽蔑する人も、結局それは文献的な史料を疎外するのみであつて、他に何等かの史料に拠つてゐるのである。史料なくして歴史の研究は全く不可能である。如何なる推論にも前提が無いものはないからである。(中略) 併しながら文字で書かれたもの即ち文献の史料に於ける位置は、他の如何なるものよりも、量に於いても、又質に於いても最も有力である。

右のように、岩橋は史料を第一とした実証的な歴史学研究を基盤としていた。このような研究思想の背景には、教えを受けた黒板・三浦の影響があつたと推測される。加えて岩橋本人も、活字校正の仕事を行った経験があることに加え、各地を歴訪し史料に直接触れて調査や分析を常々行つていたことが影響したと推測される。活字校正については、学生時代から『辞林』の校正に参加した他、国書刊行会において古典籍の翻刻・出版に関わつたことが大きいと考えられる。岩橋は国書刊行会当時のことについて、「古代、近古、硬軟種々の書物を読み、活字校正だけでも、面白い仕事であつて、真面目に従事すれば、大きに学問になる職務」と回想している<sup>12)</sup>。史料調査に関しては、例えば史料編纂所では史料蒐集のため、毎年一・二人編纂官に地方探訪出張が命じられた。加えて岩橋は東山御文庫調査のこともあり、その頃から余暇で西本願寺その他京都の地方を探訪し、御文庫調査後も大徳寺、大原三千院、叡山

文庫、曼殊院の調査をし、京都の社寺を中心とした史料の調査・研究に貢献している。<sup>(13)</sup> これらの調査報告は後に他の見聞を交え『史料採訪』<sup>(14)</sup>として出版された。以上のような黒板・三浦の影響に加え、岩橋自身が校正や調査を通して常に史料に触れ、向き合ってきた経験が岩橋の研究姿勢を形作ったと考えられる。

また、研究分野の広範さも岩橋の学問の特徴として挙げられる。これには、岩橋の置かれた立場や職歴が大いに影響していると考えられる。岩橋は生涯で様々な職場を異動しており、これが彼の研究範囲の広さに繋がっているとすることも過言ではない。また、これらの職場での経験が、岩橋の研究に影響を与えているのも事実である。

大学卒業後、大阪市史編纂係に赴任からしばらくは「懷徳堂書院」<sup>(15)</sup>、「上田秋成が事」<sup>(16)</sup>、「難波雀類書考」<sup>(17)</sup>など、大阪に関する町人文化や文芸、文人、国学者などを対象とした研究が多い。この内上田秋成に関しては、晩年に著書『上田秋成』<sup>(18)</sup>を出している。岩橋は中学時代、雨月物語を読み上田秋成を尊敬したと回顧している上、武田祐吉や折口信夫らと和歌の会を結成しており、<sup>(19)</sup>文学に対する興味・関心が元々強く、大学でも国語漢文科に在籍している。これらのことが根底にあり、帰郷を契機に地元の歴史的人物を研究したのであろう。

大正六年に京都帝国大学の助手となつてからは、本格的に芸能に関する研究を開始し、「曲舞」<sup>(20)</sup>、「琵琶法師」<sup>(21)</sup>など中世の上方における芸能の研究を行っている。なお、岩橋の芸能研究は主に三十〜五十代の頃の著作が多く、<sup>(22)</sup>分野も曲舞・幸若舞・猿楽能・輪鼓・盲僧の芸・浄瑠璃・歌舞伎・田楽・三味線など多岐にわたり、これらは後に『日本芸能史―中世歌舞の研究』<sup>(23)</sup>にまとめられている。加えて、昭和二十四年に岩橋が文学博士の学位を授与された際の論文は「中世の謡物に関する研究」という、中世芸能史に関するものであったことからわかるように、岩橋にとって芸能研究は重要なものであった。他方、この頃には本格的に中世史研究も始め、「源仲家と仲隆との懐紙の事」<sup>(24)</sup>、「寺門高僧記について」<sup>(25)</sup>なども執筆した。



大正十四年、東京帝国大学史料編纂官に任じられてからは、室町時代の史料編纂を主宰したことで中世の研究をさらに広げ、「園太暦について」<sup>(26)</sup>、「足利義満の北山第と金閣寺」<sup>(27)</sup>、「玄慧法印」<sup>(28)</sup>など、多様な分野の研究を発表している。戦後、國學院大学の史学科で法制史・上代史の講義を担当し、本格的に同分野の研究が始まる。「孝徳紀の大臣及び内臣に就いて」<sup>(29)</sup>などの論文の他、『上代史籍の研究』<sup>(30)</sup>、『上代官吏制度の研究』<sup>(31)</sup>、『律令叢説』<sup>(32)</sup>などの著書も出版している。加えて神祇・神道研究も目立つようになる。戦前より「法華神道に就いて」<sup>(33)</sup>などの論文があったが、戦後「神戸及び神郡について」<sup>(34)</sup>、「神部考」<sup>(35)</sup>などを発表し、『神道史叢説』<sup>(36)</sup>を著した。

以上のように、古代から近世までの幅広い研究分野を、実証史学による研究でカバーしていたのが岩橋の学問と言える。これらの多彩な研究分野は、学生達への指導に大いに役立ち、また、岩橋の弟子たちにも影響を与えたと思われる。岩橋は國學院大学史学の研究分野の系譜においても重要な位置にある人物であると言える。

## 二 國學院大學における岩橋小弥太

### (一) 戦前

岩橋は大正十五年、國學院大學教授を委嘱され、「古文書学」の講義を担当したのを契機に、以後大学において古文書学を中心に講ずることとなる<sup>(37)</sup>。また、昭和四年には「国史演習」の授業も受け持っている<sup>(38)</sup>。

岩橋の前任は伊木寿一であり、それまで古文書学を担当していた黒板勝美に代り、明治四十一年に就任している<sup>(39)</sup>。伊木は、岩橋が教えを受けた前々任の黒板と同じく東京帝国大学文科国史科を明治三十九年に卒業後、同大学院に入学して古文書学を専攻し、また同大学史料編纂掛に勤務し『大日本古文書』の『伊達家文書』『相良家文書』などの編纂に従事した他、後に史料編纂官として『大日本史料』九編の編纂も行った人物である<sup>(40)</sup>。伊木は明治四十一年から

大正十四年まで國學院大學で古文書学を講じていた。このように、黑板・伊木・岩橋と東京帝国大学の史料編纂官が國學院大學の古文書学を担当しており、なおかつ伊木、岩橋と黑板の影響があった者が連続して就いている。<sup>41</sup>しかしながら、岩橋は前者二人と異なり國學院大學の出身であり、以後村田正志らへと続く國學院大學出身の古文書学講師の系譜の始まりとなった。<sup>42</sup>

戦前の國學院大學における岩橋は、学部に関する活動は控えめである。当時の岩橋の仕事は史料編纂官としてのものが主であり、國學院大學での担当授業も古文書学（年によっては演習も）のみであった。ただし、岩橋も古文書学の講義以外に学部生の卒業論文の指導や査読を行っていた。「奈良朝に於ける歌舞音楽に就いての一考察」や「室町時代における徳政に就きて」等の卒業論文の題目を見るに、主に中世史や芸能文化史、上田秋成など、自分が論文を発表した分野の卒業論文を担当していたようである。<sup>43</sup>その他、講義がある日の放課後には、学生に古文書の指導もしていた。東京大学・駒澤大学の教授であった杉山博は、放課後の研究会で『実冬公記』を読んだことを回想している。<sup>45</sup>

また、同時代は岩橋の指導を受けた藤井貞文や村田正志の名が現れ始める。藤井・村田共に昭和四年卒であるが、藤井は前年の六月九日に国史学会の三島見学旅行・春季講演会において「南北朝時代とその国民と」という演題の報告を行い、<sup>46</sup>村田も昭和四年五月七日の例会において、「八幡宮異聞」という論題の報告を行っている。<sup>47</sup>藤井は昭和十一年に沼津にて行われた「講演と映画の会」においても講師を務めており、<sup>48</sup>大学卒業後、岩橋の教え子達が外部だけでなく内部学会である国史学会でも活躍し、教える側にもまわっている事が分かる。

なお、岩橋が古文書学の講師を務めていた頃の國學院大學史学において中心的な位置に居たのは、研究室を持っていた植木直一郎や松井等らであったようである。<sup>49</sup>植木は上代史や法制史の授業を担当していたが、<sup>50</sup>戦後教職追放されたため、これらの授業は岩橋が引き継ぐこととなる。

## (二) 戦後

戦後、國學院大學では昭和二十一年に皇典講究所が解散し財団法人國學院大學が設立、さらに同二十三年に新制文学部が開設した後、同二十六年に学校法人國學院大學となり、大学院も設置されるなど、めまぐるしく組織が組み替えられた。岩橋も昭和二十一年、学部教授と共に図書館長に就任し、以後同二十四年まで図書館長を勤めた。また昭和二十一年五月、史学研究室主任を委嘱された他、同二十七年には大学院委員会委員を委嘱され、大学院の設置協議に携わった。さらに、昭和三十年の日本文化研究所設置に際しては研究審議委員を委嘱されており、岩橋が学内で重要な役職に任じられていることが確認できる。

教育面においては、戦後は古文書学の授業を自らの教え子でもある村田正志に任せ、昭和二十年代前半には「史学概論」や「史学演習」・「法制史」などの授業を、同三十年代は「日本史概説」・「史籍解題」・「演習」を担当し、特に上代史を教えていた。また大学院設置に際し、修士課程の「時代史研究」・「時代史演習」を担当し、また博士課程開設申請において「時代史」の担当予定となっており、國學院大學の歴史教育の場において戦前より活動の場を広げている。なお、戦後の昭和二十年代は藤井貞文・村田正志が國學院大學の教壇に立ち始めた時期でもあり、村田は昭和二十一年より「古文書学」を、藤井は同二十二年より「日本史学（近世）」と「史学演習」を担当した。昭和二十七年の大学院文学研究科設置時には、修士課程の「時代史研究」・「時代史演習」に藤井、「文献学研究」は村田が担当となり、同年の博士課程開設に伴う予定講座には藤井が「時代史」の担当として挙げられている。また、両名共に昭和二十六年に博士号を取得している。

研究室・講義外指導の面においては、戦後、史学第一研究室は岩橋の研究室となっており、ここで各研究会が行われていた。例えば昭和二十七年には、毎週月曜日午後四時は『日本霊異記』を林陸朗（当時は助手）の指導で読み、

火曜日四時から村田が指導する古文書研究会が開催され、水曜日四時から奥野高広の『明月記』の勉強会、金曜日四時は藤井が指導する『蘭学事始』の勉強会が行われた。<sup>(66)</sup>

岩橋もここで学生に『日本書紀』の指導をしていた。<sup>(67)</sup> この頃の事について、元奈良国立博物館長の山本信吉が次のように回想している。

〈史料二〉山本信吉「先生の憶い出」<sup>(68)</sup>

当時先生が主宰されていた史学第一研究室は林陸朗さんが助手で、奥野・村田両先生が講師の机を置かれていたが、先生御留守の折は大学院生・学部の上級生がしばしば激論を交わす実に活気にあふれた部屋であった。(中略) この頃の先生は大学において古代史を講じられておられたので、授業で中世史家としての御姿に接する機会の少なかつた私共は、研究室で記録、文書、あるいは宸翰調査などのお話を承った。(中略)

当時の先生はすでに古稀を迎えておられたが、学生の史学会の研究発表会には必ず御出席になり、秋の鎌倉円覚寺の曝涼、あるいは宮内庁書陵部の展示会等には学生を率いてしばしば見学会を催された。そうした場合、説明は村田先生等にまかせられて、御自身は熱心に展示物を御覧になっておられ、直接の質問があると懇切に答えておられた。夏休みに久我家文書の勉強会をした折には、時々研究室に見えて林・横山・池永ら諸先輩の指導振りをにこにこ眺めておられた様に記憶している。三年生になって、私の同級の大平・野中・宮内君らが中心となり、先生にお願いして日本書紀の研究会を開いたが、先生は授業の始まる一時間前、九時半からの会に欠かさず御出席になった。週一日のことではあるが、朝の通勤ラッシュにかかられた御老齢の先生には御苦労なことであつたらうと今になって憶い出している。

山本信吉は昭和二十七年に國學院大學に入学したが、その時既に岩橋は古文書学ではなく、古代史を講義していた。しかし、授業外では研究室にて古文書についても指導をしていたようである。またこの頃の史学会では、村田・林ら若手研究者に基本的に指導を任せつつも、必要に応じて自らも指導をする形だったようであるが、学生から研究会での指導を希望された時は熱心に携わった。また、岩橋は勤務時間外においても若手研究者の勉強の指導をしており、歴史学における後進の育成にも精力的であった。このようなことも、國學院大學において優秀な研究者が数多く輩出された理由の一つであろう。

### (三) 国史学会との関わり

岩橋は国史学会の活動についても深く関わってきた。国史学会は明治四十二年に発足し、その機関誌『国史学』も昭和四年創刊という非常に長い歴史と伝統を持つ國學院大學の学会であるが、この学会に岩橋は戦前より携わっており、特に国史学会の転換期における主導者の一人であった。

東京大学史料編纂所に勤め、東京造形大学教授の他、講師として國學院大學で長らく教鞭を執った奥野高広は、初期の国史学会の活動に関して、会長であった三上参次の下で井野辺茂雄・沢田章・岩橋小弥太・高柳光寿・高橋隆三の諸先生が会務を指導していたことを回想している他、昭和初期の国史学会の活動について、次のように述べている。

〈史料三〉奥野高広「門戸を広く開放せよ(上)」<sup>(7)</sup>

昭和の初頭に当山俊道氏出で、続いて村田正志藤井貞文等の俊鋭が踵を接して輩出するに及び再興の気運は一挙に熟した。しかも国史学会は学生も会員になりうるとの理由から國學院大學々友会の一部として補助金を与へ

られるやうになり、学生が実務に当ることになった。(中略) その結果漸くにして発行されたのが『国史学』第一号で、時に昭和四年十一月である。(中略) この間指導者層は沢田先生を失ひ、實際上岩橋、高柳の両先生が前面に押し出されてきた。これらの先生方と共に若い先輩と学生が楽しく見学旅行に赴いた意義と興趣は計り知りがたいものがある。国史学会の事業として中堅の先輩が学生に記録や古文書の講習をし、又私的に卒業論文作製に助力を与へることも盛行した。

岩橋が国史学会の活動初期より運営に携わり、主導してきた事が窺える。また当時の国史学会では見学旅行が行われ、先輩が学生に古文書の講習をしたり卒業論文作成に助力したりと、学会内で指導や学びの場が多くあつた事が確認できる。これらの活動も、学会の会員や國學院大學の史学専攻の学生の能力を構築する場として機能しており、岩橋もここに関わっていた。

戦時中も、岩橋は国史学会の運営に深く携わっていた。戦前・戦中の不穏な空気は國學院大學にも影響を及ぼしていたが、その中で国史学会は次のような状況下にあつた。

〈史料四〉奥野高広「門戸を広く開放せよ(上)」<sup>(72)</sup>

しかし国宝や重要美術の調査に携つてゐた岩橋先生は身を以て軍部の不当な発言を体験された。それかあらぬか昭和十九年七月の例会で、俗論に迷はされず研究に精進すべき旨を述べられた。幸にして『国史学』の色彩はこのように異状な風潮に禍されて学的価値を落すことなく今日に於ても批判に堪えうることを誇としてゐる。しかし時局はいよいよ苛烈となり、高柳評議員の高配で漸く四十七・八の合併号を発行しえた後に待つ

ものは情報局の命による日本出版会の雑誌統合であった。幾度かの陳情にかゝわらず『国史学』は『国学院雑誌』に統合するとの指示を受けた。このやうな無法に屈せず岩橋評議員の高配で某所から資金を仰ぎ最後の覚悟で四十九・五十の合併号を出し、初号以来の総索引を附けた。果せるかな日本出版会からの呼出状がきた。しかし事は既に終つてゐて後の祭である。中央公論社を圧殺した情報局を啞然とさせたのだから盲蛇に怯ぢずの類でもあらう。

岩橋は世の風潮に対し、例会にて研究者としての道を全うすべきとの旨を示したのである。このことは国史学会の例会記事でも触れられており、「岩橋評議員の御講評があつて後、先生には語を改めて、決戦下國史學の研鑽に従ふ者の心構へに就いて訓された。則ち一部に見られるやうな邪道に陥ることなく、正統の道を護持して、學術報国の誠を捧ぐべきであると強調された」とある。また、情報局からの『国史学』と『国学院雑誌』の統合話に際しても、岩橋が主導してそれに真つ向から対抗するように『国史学』の合併号を刊行しており、国史学会の活動に学者としての気概が垣間見える。

戦後も岩橋と国史学会との繋がりは続く。結局四十九・五十号の刊行後活動停止状態となつたが、昭和二十二年に再建を果たした際のメンバーとして岩橋の名が挙げられている。また昭和三十二年、会長であつた渡辺世祐の死去後、会長に就任し実務に当たつた。岩橋は戦前から戦後の長きにわたり、国史学会の中心的人物として活動していたのである。

### 三 岩橋小弥太の実証史学と古文書整理

#### (一) 実証史学の提言

前述したように、岩橋は史料から歴史を見出す実証的な史学研究を基盤としている。その始まりは、國學院大學在学時に黒板勝美の古文書学の授業を聴講していた事に起因する。黒板は一章で述べた通り、日本古文書学の体系の樹立に貢献した人物であり、岩橋は黒板の古文書学に影響を受けたと考えられる。

大学卒業後の岩橋は、大阪市史編纂係、国書刊行会、三井家史編纂事務、京都帝国大学文科大學助手時代の国史研究室勤務を経て東京帝国大学史料編纂官となっている。國學院大學で黒板より学んだ学問が役立つ職場で活躍し、出版物の編纂・校正の仕事や、史料の採訪・調査を行った事で、研鑽を積みつつ自らの古文書学と学問を確立させていったと言える。その成果として、大正十五年以降、國學院大學や東京文理科大學などで古文書学を講ずるようになり、また「郷土史と史料」<sup>(6)</sup>、「古文書概説」<sup>(7)</sup>などの執筆を手がけるなど、他者へ古文書学を教授する立場としても地位を確立させていった。また、これらの職場において史料の採訪などを行った経験も、史料の調査・整理法の確立に多大な影響を与えたと思われる。

また、二章で述べたように、國學院大學において岩橋は、戦前古文書学の授業を担当していた事で後進の研究者達の育成と古文書学の浸透に大いに関わり、戦後その役割は大学院において岩橋の教え子である村田正志が古文書学の授業を担うことで引き継がれていった。この流れも、現在まで続く國學院大學の歴史学の系譜の源流と言えるだろう。

ところで、岩橋の歴史学が史料を重視した実証史学を旨としていた事は繰り返し何度も述べたが、その一方で歴史研究において史料を引用することについて、史料の性格や特性を以て、内容を鵜呑みにすること、史料の選び方、



使用方法について注意を喚起している。少々長いがここで紹介しておきたい。

〈史料五〉岩橋小弥太「郷土史と記録」<sup>78)</sup>

記録を史料として引用するには、其の性質及び価値を正確に知つて置く必要がある。記録は、それは公家衆の日記でも田舎僧侶などの私日記でも、みな自分達の経験や見聞を、後の心覚えの為に書遺して置くものであるから、後世の想像や研究の結果から記された編纂物に比しては、所謂第一次史料、根本史料であつて、史料としての価値は非常に高いものである。併し記録に書かれてある事は悉く皆、真実にして疑ふべからざる史実であると信じるのは早計である。仮令日記の筆者が直接の経験を記しても、其の筆者の観察力の如何によつては必ずしも誤つた事件を伝へないとも限らない。それ程でなくとも観察の精麁によつては、史料としての価値が大変に相違する。殊に日記の記事は筆者直接の経験ばかりではなく、人からの又聞きや世上の風聞なども往々記されてゐるのであるから、さういふものについては、所謂第二次史料と同じ傾向の弱点を有つてゐる。(中略)されば記録の記事は皆同じ程度の価値を有つてゐるわけでは決してないから、記録を引用するには、予め其の筆者の人物を十分に知つて置く必要がある。

かういふ記録の弱点に比較しては、文書は記録よりも一層根本的であり、又第一次的である。さりながら文書にも亦弱点がある。第一に文書は断片的であつて、一事件の終始一貫した史実を知る為めに、関係文書が具備してゐるといふ様な事は殆ど望まれない。次に文書は差出人と受取人との間におののみ意味が理會せられて、第三者には不明な事が往々あり、殊に後世からは一層理會が困難になり勝である。なほ亦文書を理會するといふには専門的な訓練が是非必要である。然るに記録は終始一貫した史実を知るに比較的便利であつて、其の意味も後世からも、

素人から比較的容易に理合せられる。これは記録が文書に勝れてゐる点である。実に文書と記録とは史料の両翼であつて、其の一を聞き難きものである。互に其の長所を活らかせ、短所を補つて利用すべきである。

岩橋は、史料の性格や著者の立場による情報の精粗・真贋などの特徴と、それを利用する際の知識・訓練の必要性を説き、実証史学を旨とする研究における史料の利用について提言している。古文書学の必要性を常日頃から説いていた彼の在り方を表すものであろう。

歴史学と古文書学との関係の重要性を説く提言は、國學院大學内でもしばしば見られる。次の史料もその一つである。

〈史料六〉 国史学会記事 十一月例会<sup>(80)</sup>

岩橋氏は先づ史料は歴史推論の大前提となるものであると定義され、史料の重要性価値論を説かれ、史料の取扱訓練について話を進められ、史学の補助学たる古文書学、考古学、民俗学との比較、考古学的資料と文献的資料との価値の相異を論ぜられ、次に伝誦と古文献との比較をされ、古伝誦から古代人の生活を導き出すことは極めて困難なことであるが、記録文書は直接の資料として利用することが極めて有能なる所以を力説せられ、古文書学の学的性格を説かれたのであつた。

右の史料は昭和十五年の国史学会十一月例会記事であるが、報告後の質疑の中で、岩橋は史料の価値と古文書学の学術上の有用性について触れている。学会等で再三史料と歴史学の関係、古文書学の重要性を提唱し、同世代の学者

だけでなく、後進の研究者達にもその自覚を呼び掛けていたことが確認できる。このようなこともあり、岩橋が指導した國學院大學史学は、優秀な研究者を輩出する基盤を確立することが出来たと見えよう。

## (二) 岩橋の古文書整理と久我家文書

以上のように岩橋は、古文書学の史学研究に於ける有用性を広める活動をしていたが、これだけ古文書学の普及に尽力した岩橋の史料調査・整理及びその利用とは如何なるものであったのだろうか。先述の通り岩橋は様々な職に就き、最終的に東京帝国大学の史料編纂所にて史料採訪・整理・編纂の職務に就いていたが、その手法が分かるエピソードが遺されている。岩橋は史料編纂所で『大日本史料』第七編の編纂を担当していたが、当時岩橋の下で編纂に従事していた元東京大学史料編纂所教授の玉村竹二は、第七編部において史料の検索組織が体制化されていた事を回想している。

〈史料七〉玉村竹二「岩橋編纂官への追慕」<sup>41</sup>

さて、一旦着任の後には、大拡張の際、議会で国民に公約したのは、一室一年千頁の史料一冊の進行度であると、どうあつても之を遂行せんと力められ、現にその成績は上つて、他の部室に比べて、隔段に多い原稿のストックが出来たのである。(中略)

しかしこんな成績を挙げるには、先生の見識によって、史料の検索組織が非常に完備していたからで、第七編部は、開部以来の構想が計画性に富み、史料の「総めぐり」がよく行届いて、編年カードが完備し、また記録・語録・詩文集・和歌集等の典籍別索引も極めて豊富に作成されていたからで、その道具の優秀さによって、速か

に史料を検出する事を得て、他人から見ても不可能な程の速度の編纂を可能にしたのである。開部当初は、先述の村田氏（筆者註…村田崇信）と、堀中哲一氏という臨濟宗の僧籍にあつた二人が室員で、全くの素人を駆使して、先生が先頭に立つて、この基礎作業が行われた由。先生は常々素人を教え込み乍らカードを採取するその頃の苦勞を思い出話にされている。而もそれが約一年で終了し開部二年目には「七編之一」が公刊されているのである。

史料の編年カードが完備され、典籍別索引も極めて豊富に作成されていて、これらによって史料をスムーズに検出し、相当な速さでの編纂を可能にしたため、他の部室と比べて格段に多い原稿のストックが出来上がった事を回想している。岩橋が培ってきた合理的な史料整理の手法が編纂業務に生きたことが窺える。

岩橋の古文書調査・整理法は、國學院大學においても大いに役立った。國學院大學が収蔵する重要文化財である『久我家文書』の整理についても岩橋は関わっていたのである。『久我家文書』は、五摂家につぐ七清華家の随一とされた元侯爵家久我家に伝来した平安後期以来の一大古文書群で、昭和六年に國學院大學附属図書館に寄託され、昭和二十六年四月二十八日に大学の所有となった。<sup>(83)</sup> 総数は二千八百点程であり、<sup>(84)</sup> 家領莊園の諸問題を主とする中世文書、久我家の宮中儀礼・叙位任官・文芸芸能との関わりや当道座の支配などの種々の内容を含む近世文書、久我建通・通久父子の明治初年における活動を主とする近代文書などからなり、文書の種類も多数の編旨・女房奉書・口宣案・関東御教書・將軍家御判御教書・御内書をはじめ文芸・芸能・儀礼の史料など多岐にわたっている。<sup>(85)</sup> この整理と研究には、村田正志、山本信吉、藤井貞文、林陸朗らそうそうたる面々が若き日に当たっていた。後に國學院大學で古文書を講義した村田正志は、当時の事を次のように語っている。

〈史料八〉「岩橋小弥太博士と『久我家文書』」<sup>(86)</sup>

『久我家文書』の話が持ち上がったのは昭和五年（一九三〇）か六年頃だったでしょうか、藤井貞文君の発案だったと思われます。（中略）沢田館長〔筆者註：沢田章図書館長〕は大変熱心な方で、土曜日の午後、図書館の一室を提供してくれて、私が中心に若い者たちが整理を始めました。学校を出たの者にとって整理の方法が分からない。岩橋先生はとにかく「カードを作りなさい」とおっしゃる。カードに取って、そのカードで整理し、目録の原稿を書くと言うやり方を教えていただきました。重要と認める文書は岩橋先生の指示に従って、私が史料編纂所に持参して写真に収め、済んだら持ち帰り、また次のを持って行く。こう言うふうなことを繰り返しました。

岩橋が若手研究者たちに対し、実際に古文書を整理する方法を教えており、それによって村田らが整理方法を身に着けていたことがわかる。ここで整理された『久我家文書』は複数回展覧会が行われ、目録も発行された<sup>(87)</sup>。さらに、昭和十年には毎週火曜日に岩橋を講師とした学生向けの古文書講習会が開講され、その演習に『久我家文書』が供された<sup>(88)</sup>。この講習会は翌年、金曜日に移動し、村田を講師として引き続き開講されている<sup>(89)</sup>。また戦後になると、昭和二十三年には毎週水曜開催の古文書研究会で使用された他、夏休みにも『久我家文書』の勉強会が行われており<sup>(90)</sup>、前から戦後にかけて学生へのテキストとして使用され、学生や若手研究者の能力向上に資するものとして利用されている。戦前・戦後にかけて、古文書整理や研究会を通し、『久我家文書』が学生や若手研究者への指導・育成に大いに関わっていたことがわかる。

このように、岩橋の古文書学とそれを基盤とした整理の手法が、『久我家文書』の整理と利用を通して、國學院大學の歴史学を担う次代の人々に受け継がれていったことがわかる。現在まで続く國學院大學の古文書学・史料学に対

し、岩橋が与えてきた影響は見逃せないものであると言えるだろう。

### おわりに

本稿では、岩橋の学問基盤、國學院大學における立場と学生たちへの指導、そして古文書の調査・整理について触れてきた。岩橋の研究は、その職歴と学問が結びつく形で領域が広がっており、就いた職や地域に関連した研究も行った。加えて中学時代より折口信夫・武田祐吉ら友人と和歌など文学に親しんだことも、その学問領域の形成に影響した。また岩橋は、史料を前提とした実証的な歴史学研究を基盤としたが、背景には教えを受けた黒板勝美・三浦周行の影響に加え、様々な職場での経験や、実際に各地の史料調査を数多く行ったことがあったと考えられる。この実証史学によって、古代から近世までの幅広い研究分野をカバーしており、これらの下地が学生への指導に役立ったことは間違いない。

國學院大學での岩橋は、戦前より古文書学を教えた他、卒業論文や放課後の指導を行っていたが、本格的に学部で授業や役職を持ったのは戦後であり、植木直一郎が去った後、上代史や法制史の教鞭を執っていた。戦後は第一研究室が岩橋の研究室となっており、ここで各研究会が行われ、基本的には藤井貞文・村田正志・奥野高広・林陸朗らがその指導役となったが、岩橋も折を見て指導を行った他、学生からの勉強の要望や質問には親身になって答えており、後進の育成に精力的であった。岩橋は、古文書学の必要性と重要性を常々説いており、このような姿勢が國學院大學において、藤井貞文・村田正志・奥野高広・林陸朗・杉山博・山本信吉をはじめとする数多くの優れた研究者を育てたと言えよう。

一方で岩橋は、国史学会の歴史上において、何度も重要な局面に対峙した人物でもあった。『国史学』創刊期以来

の運営、戦時中の不穏な学会の風潮、国史学会の活動停止と再建において岩橋は重要な役割を果たし、会長にも就任している。国史学会と岩橋とは、切っても切れない関係にあった。

そして、岩橋を語る上で欠かせないのが古文書の調査・整理である。東京帝国大学の史料編纂所を始めとする数々の職場にて長年培ってきたその手腕は、國學院大學においても遺憾なく発揮され、『久我家文書』の整理に大いに資するとともに、村田・藤井ら後進の研究者たちへも受け継がれた他、『久我家文書』そのものも学生への教育や研究に供され、國學院大學にとってまたとない資産となった。岩橋は、この下地作りに多大なる貢献をしたとともに、國學院大學における学術資産活用の先駆者としても位置付けられるだろう。

以上、本稿で取り上げたように、岩橋は國學院大學において大きな影響を残しており、現在に続く國學院大學史学の源流を作った一人と言っても過言ではない。今後も岩橋やその指導を受けた人物を追うことで、國學院大學史学の潮流を明らかにすることができるのではないかと考える。

## 註

- (1) 岩橋小弥太「葉間堂老翁自伝」(『國學院雜誌』八十一―十一 昭和五十四年)
- (2) 「岩橋小弥太博士略年譜」(『国史学』一〇八 昭和五十四年)
- (3) 國學院大學は、明治二十三年に皇典講究所を母体とした教育機関である「國學院」として誕生し、同三十七年、専門学校令によって「私立國學院」に改称し、更に同三十九年に文部省告示により「私立國學院大學」と改称しているが、本稿では名称を「國學院大學」に統一する。
- (4) 帝國学士院編『宸翰英華』紀元二千六百年奉祝会 昭和十九年
- (5) 前掲2「岩橋小弥太博士略年譜」七九頁

- (6) 前掲1「葉間堂老翁自伝」四〇九頁
- (7) 前掲1「葉間堂老翁自伝」四〇九頁
- (8) 「黒板勝美」(『国史大辞典』四卷 吉川弘文館 昭和五十八年) 九五四頁
- (9) 「三浦周行」(『国史大辞典』十三卷 吉川弘文館 平成四年) 二六三—二六四頁
- (10) 前掲1「葉間堂老翁自伝」四一二頁。岩橋は、国史研究室の仕事は一切を三浦周行が監督していたと回想している。
- (11) 岩橋小弥太「郷土史と史料」(『郷土史研究講座(二)』雄山閣 昭和六年) 二—三頁
- (12) 前掲1「葉間堂老翁自伝」四一〇頁
- (13) 前掲1「葉間堂老翁自伝」四一四頁
- (14) 岩橋小弥太「史料探訪」大日本出版社峯文荘 昭和十九年
- (15) 岩橋小弥太「懷徳堂書院」(『國學院雜誌』一四—一〇・一一・一二 明治四十一年)
- (16) 岩橋小弥太「上田秋成が事」(『國學院雜誌』一五—一・二 明治四十二年)
- (17) 岩橋小弥太「難波雀類書考」(『歴史地理』二八—一・二 大正五年)
- (18) 岩橋小弥太「上田秋成」有精堂出版 昭和五十年
- (19) 前掲1「葉間堂老翁自伝」四〇七頁
- (20) 岩橋小弥太「曲舞」(『芸文』一一—一・二・三 大正九年)
- (21) 岩橋小弥太「琵琶法師」(『風俗研究』二六・二七 大正十一年)
- (22) 岩橋の最初の芸能関係の著作は、二十代前半に発表した「小野お通集伝—及浄瑠璃十二段草子の事—(雑録)」(『國學院雜誌』十三—五 明治四十年)である。
- (23) 岩橋小弥太『日本芸能史—中世歌舞の研究』芸苑社 昭和二十六年
- (24) 岩橋小弥太「源仲家と仲隆との懐紙の事」(『心の花』二六—一〇 大正十一年)
- (25) 岩橋小弥太「寺門高僧記について」(『仏教研究』五—二 大正十三年)
- (26) 岩橋小弥太「園太暦について」(『歴史と地理』一六—二 大正十四年)
- (27) 岩橋小弥太「足利義満の北山第と金閣寺」(『史苑』一一—三・四 昭和十三年)



- (28) 岩橋小弥太「玄慧法印」(『國學院雜誌』四五—一 昭和十四年)
- (29) 岩橋小弥太「孝徳紀の大臣及び内臣に就いて」(『国史学』五八 昭和二十七年)
- (30) 岩橋小弥太「上代史籍の研究」吉川弘文館 昭和三十一年・三十三年
- (31) 岩橋小弥太「上代官吏制度の研究」吉川弘文館 昭和三十一年
- (32) 岩橋小弥太「律令叢説」吉川弘文館 昭和四十七年
- (33) 岩橋小弥太「法華神道に就いて」(『国史学』一八 昭和九年)
- (34) 岩橋小弥太「神戸及び神郡について」(『千家尊宜還曆記念神道論文集』神道学会 昭和三十三年)
- (35) 岩橋小弥太「神部考」(『神道学』三九 昭和三十八年)
- (36) 岩橋小弥太「神道史叢説」吉川弘文館 昭和四十六年
- (37) 大正十五年六月・昭和三年八月・昭和四年六月『國學院雜誌』彙報(三二—六 一三六頁、三四—八 一一四頁、三五—六 一二〇頁)及び、学報三〇—一三六号(昭和五年四月—昭和十七年十一月)。なお本稿で引用した学報については『國學院大學新聞 縮刷版 創刊号—第三〇〇号』(國學院大學新聞学会 昭和四十三年)を参照した。紙数の問題もあるため、以降は略記する。
- (38) 『國學院雜誌』彙報 三五—六 昭和四年六月 一二〇頁
- (39) 『國學院雜誌』彙報 一四—五 明治四十一年五月 一〇五頁
- (40) 「伊木寿一」(『国史大辞典』一卷 吉川弘文館 昭和五十四年) 四四七頁
- (41) 岩橋は一章で触れたとおり、大学在学中に黒板の古文書学の授業を受け、卒業後に赴任した大阪市史編纂掛も黒板に紹介されたと同想している(前掲1「葉間堂老翁自伝」四〇九頁)。伊木は明治三十九年に東京帝大を卒業しているが、同三十五年に黒板が文科大学講師を嘱託されており(前掲8「黒板勝美」九五—四頁)、授業を受けていたと考えられる。
- (42) なお村田も國學院大學卒業後、東京帝国大学史料編纂所に勤務し、『大日本史料』の編纂に従事している。(山本信吉「村田正志先生を追悼して」(『国史学』一九九 平成二十一年) 一六三頁)
- (43) 学報四九「卒業論文は今年も近世が優勢」(昭和八年一月十八日) 一七九頁
- (44) この他、「室町初期における禅林の一考察」(学報四一「学部卒業論文題目 昭和四年期生」(昭和七年一月一日) 一五三頁)、

「東山時代の世相」・「上田秋成論」(学報六八「昭和十年度学部卒業論文題目」(昭和十年十二月一日)二五六頁)他、多数の卒業論文を担当した。

- (45) 杉山博「太平洋戦争の直前・直後のことども」(『国史学』一〇八 昭和五十四年)七三頁
- (46) 学報一五「国史学会の講演見学旅行」(昭和三年六月十二日)六四頁
- (47) 学報二三「国史学会の例会」(会と催) (昭和四年五月十四日)九四頁
- (48) 学報七一「各部情報 国史学会」(昭和十一年六月一日)二六九頁
- (49) 当時の研究室は国史と東洋史の二つであり、それぞれ第一国史研究室が植木、第二東洋史研究室が松井であった。(学報二四「研究室施設」(昭和四年六月七日)九七頁)
- (50) 学報七〇「昭和十一年度学部各科講座決る」(昭和十一年五月一日)二六四頁、他。
- (51) 『國學院大學百年史 下巻』(学校法人國學院大學 平成六年)第八・九篇を参照。なお、大学院は当初日本文学専攻・神道学専攻修士課程が開設され、史学専攻の開設は翌年に持ち越された。また昭和二十八年には大学院日本文学専攻・日本史学専攻博士課程が開設された。
- (52) 前掲2「岩橋小弥太博士略年譜」八三―八四頁
- (53) 前掲2「岩橋小弥太博士略年譜」八四頁
- (54) 前掲51『國學院大學百年史 下巻』一六一―一九頁
- (55) 学報一五二「昭和廿二年度学部開講々座内容」(昭和二十二年四月三十日)四七一頁
- (56) 前掲51『國學院大學百年史 下巻』一二二―六頁。なお授業は昭和三十一年度時点のもの。
- (57) 学報二八四「紫綬褒章 本学三教授が受章」(昭和三十九年十一月十日)八五九頁、他。
- (58) 前掲51『國學院大學百年史 下巻』一一六―四頁
- (59) 前掲51『國學院大學百年史 下巻』一一六―七頁
- (60) 前掲51『國學院大學百年史 下巻』一〇二―二頁
- (61) 前掲55「昭和廿二年度学部開講々座内容」四七一頁
- (62) 前掲51『國學院大學百年史 下巻』一一六―五頁

- (63) 前掲51『國學院大學百年史 下巻』一一六七頁
- (64) 学報一七〇「燦たり!この足蹟 奥野・岸本・村田・藤井氏らに博士号授与」(昭和二十六年四月二十日)五〇七頁
- (65) 戦前から昭和二十年代初頭まで、史学は第一・第二研究室に分かれ、それぞれ第一を国史、第二を外国史の教授が持つていた(前掲51『國學院大學百年史 下巻』一〇九〇—一〇九二頁)。研究室は後に日本史学、外国史学、考古学の専攻ごとに分かれ、昭和三十八年時点では日本史学研究室は第三まであり、第一は藤井、第二は桑田・高柳兩名、第三は岩橋に割り振られている(学報二六八「研究室」(昭和三十八年四月十日)七九二頁)。
- (66) 学報一七九「研究会だより」(昭和二十七年十一月一日)五二四頁。余談だが、古代史の研究者として知られる林は、昭和二十八年はこの他に近世農村史料(学報第一八一「研究会だより」(昭和二十八年二月二十五日)五二九頁)、翌二十九年には近世農村経済、寄生地主制の展開に関する指導もしている(学報一八三「研究会だより」(昭和二十八年五月二十日)五三三頁)。昭和三十年代には日本特殊史という授業も担当しており(前掲51『國學院大學百年史 下巻』一二三六頁)、これは近世の地方の農村史料の授業であった(鈴木靖民「林陸朗先生の追憶」(『国史学』一二三三号 平成二十九年)二五〇頁)。また後年、『長崎唐通事』など近世史の研究書も出版している(林陸朗『長崎唐通事』(吉川弘文館 平成十二年、増補版長崎文献社 平成二十二年)。若き日に岩橋らの元で近世史や古文書学を学んだ経験が、後に大いに役立っていた事が垣間見える。
- (67) 学報一八六「研究会だより」(昭和二十八年十一月一日)五四一頁
- (68) 山本信吉「先生の憶い出」(『国史学』一〇八 昭和五十四年)七六頁
- (69) 山本は、昭和三十四年六月から四十八年十二月まで『小右記』の勉強のため、毎週日曜日に岩橋の自宅を訪れていた。この事について山本は、大学院在学中に平安時代の日記を勉強したいと考え、岩橋に相談をしたことが発端だったと語っている(前掲68 山本信吉「先生の憶い出」七七頁)。
- (70) 学報一七九奥野高広「門戸を広く開放せよ(上)」(昭和二十七年十一月一日)五二六頁
- (71) 前掲70奥野高広「門戸を広く開放せよ(上)」五二六頁
- (72) 前掲70奥野高広「門戸を広く開放せよ(上)」五二六頁
- (73) 「国史学会記事—七月例会」(『国史学』四七・四八 昭和十九年)一二六—一二七頁。この事について奥野高広は、「一連の国策に付和雷同した人々に警世の声を送ったのである。時流に乗らない地味な実証史学の学風の面目躍如たるものがある」

- と高く評価している（『七十年の回顧』〈『国史学』一〇・一一一 昭和五十五年〉一三七頁）。
- (74) 学報二三五「国史学会が五十周年」（昭和三十四年十二月十日）六七三頁。なお、その他の再建メンバーとしては、渡辺世祐、高橋隆三、桑田忠親、大場磐雄、樋口清之らが挙げられている。
- (75) 「学会消息」昭和三十二年度大会（『国史学』六九 昭和三十二年）八九頁
- (76) 岩橋小弥太「郷土史と記録」（『郷土史研究講座（二）』雄山閣 昭和六年）
- (77) 岩橋小弥太「古文書概説」（『郷土史研究講座（八）』雄山閣 昭和七年）
- (78) 前掲76「郷土史と記録」一二二―一二三頁
- (79) 岩橋は記録について、「元來記録とは朝儀の参考資料となる公家衆の日記や抄録に限つて言つたもので、かういふ僧侶の私日記や、社寺の政所の日記の様なものゝは記録とはいはなかつたのであるが、今は一般にかういふ日記をも広く記録といつてゐる。否われ／＼は学問的には、文字で記されてゐる第一次史料を分類して、文書、記録、銘文といひ其の記録といふのは、一切の日記はもとよりの事、日記のみでなく、すべて心覚えの爲めに記して置くもの全部を含めて言ふのである」と説明している（前掲76「郷土史と記録」一二二―一二三頁）。
- (80) 「国史学会記事」十一月例会（『国史学』四二 昭和十六年）五一頁
- (81) 玉村竹二「岩橋編纂官への追慕」（『国史学』一〇八 昭和五十四年）六三頁
- (82) 國學院大學久我家文書編纂委員会『久我家文書』別卷 國學院大學 昭和六十二年 一頁
- (83) 「学会消息」（『国史学』五七 昭和二十七年）七五頁
- (84) 國學院大學図書館調査室『國學院大學図書館所蔵久我家文書目録』國學院大學図書館 昭和六十三年 凡例より
- (85) 前掲82『久我家文書』別卷 五一―六頁
- (86) 「岩橋小弥太博士と『久我家文書』」（『校史』一八 國學院大學校史資料課 平成十八年）三頁
- (87) 一回目は昭和六年十月二十四日で、国史学会の大会にて行われた（『国史学会記事』久我家文書展覧会の開催）（『国史学』九 昭和六年）七三頁。二回目は昭和十年五月二十五日で、国史学会の主催で春期大会と併せて神職会館会議室にて行われた（『国史学会記事』第二回久我家文書展覧会）（『国史学』二四 昭和十年）七六頁）。
- (88) 「侯爵久我家文書展覧目録」（『国史学』一〇 昭和七年 附録）

- (89) 「国史学会記事―古文書講習会」(『国史学』二四 昭和十年) 七五頁
- (90) 「国史学会記事―古文書講習会」(『国史学』二七 昭和十一年) 八二頁
- (91) 学報一六七「研究室だより―史学第一研究室」(昭和二十三年十一月二十五日) 五〇三頁
- (92) 前掲68 山本信吉「先生の憶い出」 七六頁